

けんごしづか 牽牛子塚古墳の発掘成果を考える

はじめに

考古学は、人類によって土地に刻まれた遺構や出土遺物から歴史をひも解く。それらはすべてが埋もれているわけではなく、さほど変わることはない姿を、今日まで残す場合もある。古墳や城郭、貝塚などで生活圏の延長にある遺跡に親しまれた記憶を持たれる方もいるだろう。典型は飛鳥時代に造られた上・中・下ッ道で、道幅を変えながら奈良盆地を貫く直線道路として存在し、いまでも人々のくらしに使われている。それだけに地割りや古地図をもとにする歴史地理学、時には理化学分野との連携を怠ってはならない。

なにより肝心なのは、文献史学との関係である。対象が飛鳥時代の終末期古墳ともなれば、考古学成果と史料、具体的には『古事記』・『日本書紀』などの記事やその研究成果との整合性が問われる。なかでも古墳被葬者の考定は、墓誌の埋納や墓碑の建立などの葬法を採用しなかった日本列島の古墳文化では、高位の人物といえども被葬地を特定することは至難である。しかし、今回は違った。

牽牛子塚古墳の発掘調査

2010年9月と12月に明日香村教育委員会により発表された奈良県牽牛子塚古墳と南側で見つかった越塚御門古墳の考古学成果を得て、牽牛子塚古墳を齊明天皇と間人皇女（舒明天皇の后）、越塚御門古墳を大田皇女（大海人皇子の妃）の陵墓と特定できる条件がほぼ整った。もっとも、宮内庁は高取町車木のケンノウという場所を齊明陵とする。今後も墓誌などの出土がない限り、変更はしないという。

牽牛子塚古墳は、近鉄吉野線飛鳥駅の西方にある越智丘陵の尾根先端頂上に築かれた終末期古墳。過去の調査で夾紵棺、歯牙、七宝亀甲形座金具、金銅製八花文座金具、金銅製六花文座金具、玉類などが出土している。夾紵棺とは、原型に合わせて布と漆によって製作された棺のこと。牽牛子塚古墳の場合は、カラムシ（苧）による麻布と漆を交互に35枚分重ねて2.3cm前後の厚みとした。棺

奈良県立橿原考古学研究所 総括研究員 今尾文昭

身と棺蓋の合わせ目部分には、長方形の釘穴が穿たれ金銅製八花文座金具が付く（表写真下右）。七宝亀甲形座金具については、六花弁内に緑色、外側を赤褐色に配色するものと、その逆パターンの2種がある。天武・持統陵の野口王墓古墳にも使われたとみられ、当時の最高位もしくはそれに近い人物の棺となっていた。それだけに、かねてから牽牛子塚古墳を齊明陵とみなす意見があった。そして今回の調査を迎えた。墳丘裾をとりまく凝灰岩の石敷きが直線で検出され、側辺の内角135度の八角墳となる。対辺間距離22m、外側二重にめぐる砂利敷きを含めると32m以上になる。従来は円墳か八角墳か判断が分かれたが、これで決着した。

凝灰岩の巨石を削り抜いた二つの埋葬施設を設けた横口式石槨にも特徴がある。中央に幅45cmの仕切り壁を設けて、長さ2.1m、幅1.2m、高さ1.3mのほぼ同規模の東西二槨構造となる。夾紵棺のサイズは、推定値で長さ1.8m、幅65cm、高さ55cmとなる。石槨は棺を収めるともう一杯で、ほとんど隙間がない。横口式石槨は一度きりの単次葬を前提としたものだ。横穴式石室が追葬可能な空間を墓室内にもつとは異なる。

さらに横口式石槨全体を外護する石英安山岩の切石列の存在が明らかとなった。従来は開口部の両側に石英安山岩製石材を用いた短めの羨道が付くと思われていたが、それは切石列を構成する一部であることが判明した。つまり墓道から直接、横口式石槨の開口部に棺を収めることになる。

被葬者の特定と築造時期

調査成果に接しては八角墳であること、合葬墓であること、陵名にふさわしい立地にあることなどから『日本書紀』天智6年条（667年）の「天とよたからいかし、ひたらしひめすめらみこと（あまのつたの豊財重日足姫天皇（齊明）と間人皇女とを小市岡上陵に合せ葬せり。是の日に、皇孫大田皇女を、陵の前の墓に葬す。）」の記事中の「小市岡上陵」にあたる見解が多く寄せられた。残るは大田皇女墓の存在にあったが、次いで発表の越塚御

門古墳は、なんと南20mの至近距離にある横口式石槨。まさに「陵前」の墓。

しかしながら、牽牛子塚古墳は①羨道の喪失、②横口式石槨への凝灰岩使用、③尾根頂上部への選地と大規模な背面カットの不採用、④唐尺（1尺が30cm前後）の採用などから7世紀第3四半期以前の築造とするに問題がある。687年に造営開始の天武陵（野口王墓古墳）との比較においても後出する要素が多い。それに石槨の開口部はひとつ。二人の埋葬は同時であるからそれは予定された葬送、すなわち「改葬」という事情にもとづいたものと推測できる。被葬者が特定できてもなお築造時期をめぐっては、課題がある。

じつはこういった事情を物語るのは、『続日本紀』文武3年条（699年）の越智・山科二山陵（齊明陵と天智陵）の造営記事の方である。「天下の罪有る者を赦す。但し十悪・強窃の二盗は、赦の限に在らず」とのたまふ。越智・山科の二の山陵を営造せむと欲るが為なり。」、次いで造営担当者と人員を示す。すでに存在したはずの齊明陵の築造は不可解だが、改葬を示したものとみなせば、牽牛子塚古墳の構造から導かれた考古学成果とうまく整合する。667年の記事は、大田皇女の葬送以前の齊明陵の存在は示すが、それは初葬とみるべきものと私は考える。

八角墳築造の意義

八角墳およびその候補となる古墳は、関東や中国地方にもある。それでも20基程度だから、やはりめずらしい。ご存知のように6世紀末葉ごろまで各地の古墳時代の首長は、前方後円墳を築いたが、その後はとくに畿内（近畿中部）の大王や有力豪族は大型の円墳や方墳を採用した。

こういった変化を経て、舒明陵とみられる奈良県段の塚古墳は八角墳として造られた。現在の考古学の研究成果からみてということだが、天智陵—京都府御廟野古墳、天武・持統陵—奈良県野口王墓古墳、文武陵—奈良県中尾山古墳のいずれもが八角墳である。7世紀中葉から8世紀初葉の大王・天皇は、八角墳に葬られた。それだけに墳形に、なにか特別な意味があるのだろうか。

元日朝賀や即位式などにおいて天皇の御座とな高御座は「延喜式」内匠寮や「文安御即位調度

牽牛子塚古墳の航空写真（白線部分が凝灰岩石敷き）

図」（1444年—文安元—藤原光忠書写）によって、上中下の三段からなり下段が平面方形、上中段が八角形になることが知られる。八角墳はこれを模倣したものではないかとする見解がある。

そもそも高御座の表現は、697年（文武元）の文武天皇即位の宣命に「この天津日嗣高御座の業」とあるのが最初で、「天津日嗣」という語句につづけて「高御座」とあり、天皇位の象徴とされる。そして、①729年の天平改元の宣命に「この天つ高御座に坐して天地八方を治め賜ひ調へ賜ふ事」とあり、つまり天皇は天と地の八方を治めるとある。②『万葉集』に「八隅知之吾（我）大王」の表現があり、これは天皇が国土の隅々まで支配することを意味する。③大室令の詔書冒頭の天皇表記のうちに「明神御大八洲天皇」があらみかみとおほやしまくにしらすめらみこととみられる。これら観念がもとになって高御座を八角形とすることに導いたとする先行研究がある。

もっとも高御座はこれから王位に就こうとする新生の王のための儀式に用いられた装置であり、古墳の場合は直ちに同様とはいかない。被葬者のための古墳であるからには、「あの世の支配をこの世と同様に示す」というのが、八角墳採用の意義だと考える。

おわりに

八角墳を大王・天皇が採用した背景には、来世にも王統譜にもとづく歴代の王による支配が継続するという意識を最高支配者層が持ち始めたことにあるとみた。豪族層とはまったく異なる外観の墳墓を創り出す基盤には、このような意識が作用したのではないかと考える。そして、699年の記事は父親—天智の山科陵を改め、祖母—齊明の越智陵を改葬して、文武へと直系で継ぐ持統太上天皇の皇統意識が顕在化した一大事業ではなかったか。